

大阪の言葉

文 町田康
Machida Kou

画 浅妻健司

私は二十歳まで大阪で暮らしたが、そのときは大阪という土地や土地柄を強く意識することはなかった。それを意識するようになったのは四十年前、二十歳を過ぎて東京で暮らすようになってからである。

なぜというに当時は情報技術も未発達で東西の距離が今よりもずっと遠く、言葉をはじめとして人の気質や風俗が随分と違い、人間関係に齟齬をきたして悩むことが多かったからで、それによって初めて、自分は大阪の人間である、と意識するようになったのである。

私はカネが入ると本屋に行つて、元々好きだった落語や漫才についての本を皮切りに、大阪の文化や歴史について記した本や大阪が舞台となった小説など大阪に関連する本を買っては読むようになった。

そして大阪に居るときは知らなかったことを知ってそれに感じ入り、のめりこんだ。

織田作之助の小説を読むなどしたのもこの頃である。

二十歳そこそこの、なんのコネも手に職もない餓鬼がひとり都会に出て、その不安を誤魔化すための理屈を本から借りてきているようなところもあった。

「俺は大阪の人間や。そこらの田舎者と一緒にすな。なめとつたらしばきあげんど」

と口に出しては言わない。言わないけれども心のな

かでそう思っていたのである。

大阪に居るときはそんな界限には寄りつかず吉野家やファミレスにばかり行っていたけれど、「鱧の皮の味もわからんもんが」とか、歌舞伎なんて見たこともないくせに、「今の噺家はええ芝居見てないから可哀想や」などと嘯き、目を剥いて力んでいたのである。

かくして他国で暮らす私にとって大阪はスペシャルなものとなっていった。だから用があつて大阪に帰るとたいへんに心が落ち着いて東京に戻りたくなくなつて困つた。

それはスペシャルであると同時にその頃の私にとっては、事物の本来あるべき状態、であつたのである。

そしてそんなことが重なるうちに私はなにかにつけ大阪を振り回すようになった。というのは例えば上方落語の旅ネタによく出てくる大阪の元気な若者が、

「こら、大阪の若いもんやで、大阪のもんがやねえ、いっぺん泥の付いたワラジなんか二度と履くかい」

「嘘やと思たら大阪へ出て来い。大阪のぎこばへ。とれとれの鯛がドテラ着て火鉢の前でプカプカ煙草吸うてる」

「当たり前やないか、大阪の若いもんやちゆうて泊まつてんねんで、酒も呑まんて寝たてなことなつたら大阪

もんの名折れんなるぞ」

なんて旅先で威張り散らすのに似ていたかも知れない。

とはいうものの当たり前の話だが、そんなことで他国の人が恐れ入るはずがない。

「なめとつたらあかんど、俺は大阪の人間じゃ」

「それがなにか？」

となつて終わりである。それどころか少しばかりファッションシーな人間と思われ、普通以下の扱いを受けることも少なくなく、私はだんだんと自分が大阪の人間であることを主張しなくなった。

といてしかし自分が大阪の人間であるということ意識しなくなったかという点、そんなことはなく、その思いは日々、強まるばかりである。

というのはそれが、私が現今やっていることに関係して、私は見聞きしたことや心に想ったことを言葉に変換して日を暮らしているのだが、そのときに大阪の言葉がとんでもなく心強い味方になってくれるからである。

そしてこれらの言葉の後ろにはかつて見た景色や幼い頃に聞いた年寄りの言葉が連なつてあり、遠く離れたところで個々バラバラに生きている自分たちが言葉において過去とそして未来と繋がっていることをサウンドを伴う実感として感じさせてくれて、自分が書く下手クソな文章に彩りと躍動感を与えてくれるのである。

そしてそれを使う際、私は普通は会話文だけではなく地の文、ナレーションのところにもこれを使う。普通はそういうことはしないし、したら怒られるのだけ

れども、こうしたなんでも純化していくのではなく、ミックスして使うのも、大阪の食におけるなんでもミックスする文化に親しんでいたからだ、ということに気づけるだろうか。けれども自分ではそんな気がしている。

先日、十六年前に物故した尼崎市出身の作家、中島らも氏の『今夜、すべてのパー』という題の小説を読んで、その中に出てくる老人の言葉に深い感動を覚えた。この小説が出たのは一九九一年、ということは書かれたのはその数年前だろう。このときこの老人は九十五歳ということで、つまり明治の中頃に生まれた人ということになる。その人の話す、けつして文学作品には描かれない大阪の市井の人の話し言葉がこの小説の中には保存されて、あつた。

私はこれを宝物のように感じる。時とともに言葉は変化し、人情も変わるが、こうした小説や語り芸を通じて現在も触れることが出来る大阪の言葉、これこそが私にとっての大阪であり、もつという私という存在そのものなのである。

まちだ・こう 1962年、大阪府生まれ。町田町蔵の名で歌手活動を始め、1981年、パンクバンド「INU」の『メシ喰うな!』でレコードデビュー、俳優としても活躍。1996年、『くっすん大黒』で作家デビュー。本作は第7回 Bunshun ドゥマゴ文学賞、第19回野間文芸新人賞を受賞し、芥川賞にもノミネートされる。2000年、『きれぎれ』で芥川賞、2001年詩集『土間の四十八滝』で萩原朝太郎賞、2002年『権現の踊り子』で川端康成文学賞、2005年『告白』で谷崎潤一郎賞、2008年『宿屋めぐり』で野間文芸賞を受賞。文芸活動のほか2016年よりバンド「汝、我が民に非ズ」を本格的に始動させる。近著に『記憶の盆をどり』『令和の雑駁なマルスの歌』など。

